

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

【氏名】伊藤亜聖

【所属】(助成決定時) 慶應義塾大学大学院経済学研究科

【研究題目】東アジア雑貨産業の構造と展開—浙江省と広東省の事例分析—

【研究の目的】

本研究は東アジアの雑貨産業に注目し、その構造と展開を明らかにすることを目的としている。昨今、ものづくりの領域では広い意味で東アジアが「世界の工場」と呼ばれるに至っている。とりわけ中国では外資企業と中国地場企業を含めて膨大な量の工業製品が製造されている。日本から見れば、生産面ではかつて日本国内で完結していた製造工程が、90年代以降東アジア規模の分業ネットワークを構築するに至っており、また消費面では中国製品なしには日常生活は成り立たないと言っても過言ではない。筆者はこうした東アジアのものづくりの展開を、とりわけ中国に注目し、日常生活と不可分な雑貨製品を取り上げることで解明しようと考えている。

【研究の内容・方法】

より具体的には、中国製造業の競争力を定性的な現地での聞き取りと、定量的な分析の両面から分析する。重視するのは現地での調査であり、定性的調査を重視する根拠は、雑貨産業の場合には特定の地域に生産・流通企業が集中する傾向があり、その分業・取引関係と構造、歴史的な推移を現地での聞き取りから明らかにすることが、当該産業の競争力を評価する上で極めて重要なためである。具体的には中国広東省に半年間滞在し、産業集積地域を6か所訪問し、現地政府、メーカー、商社、業界団体からの聞き取りを行った。その際には企業の創業・発展の歴史から、部材の調達元、競争相手の所在、目下の経営課題と戦略などを質問した。

同時に近年利用可能となったマイクロデータを活用して、空間的な集積と、財務データを利用した生産性の測定も行った。データの出所は2つあり、i)ミシガン大学 China Data Center の04年センサスデータとii)中国輸出入信用銀行が持つ中国国内約40万社の企業財務データである。処理ソフトは空間分析についてはArcGISを利用する。定量的なデータ分析により中国の集積の概観と、県レベルの生産性の推計等が可能となるが、「どのように集積が形成されてきたのか?」、「集積内部でどのような効果が発生しているのか?」、「雑貨産業としてどのような生産流通構造であり、どのような発展方向性が示唆されるのか?」といった論点については、定性的調査でこそ解明可能なことであり、筆者は両方法を活用した。

【結論・考察】

主要な結論として、第一に定性的調査からは中国における製造業の空間的な重層性を見出し、第二に定量的分析から産業の集積地における低利潤性、低生産性を見出した。

第一の空間的な重層性とは、中国の特定地域の製造業の競争力が当該地域のみでは説明不可能な点を指す。例えば、現地調査を行った広東省の古鎮鎮は、中国最大の照明器具産地であった。照明器具を生産するためには電気部品のみならず、ランプならば金属部品、陶器部品、プラスチック部品など、多様な材質の部品は必要となる。そこで現地調査の際に部品の調達について詳しく聞き取りを行ったところ、珠江デルタ内の電気部品産地から電気部品が、陶器産地から陶器が、そして周辺の金属加工集積地で金属部品を加工していることがわかった。更に興味深いのは、一部重要部品(装飾用クリスタル)が遠く浙江省から調達されていた点で、これは即ち中国国内の有力産業集積が相互に関連し、そしてその関連によって競争力を獲得している、という点である。筆者はこの空間的重層性が、中国という巨大な経済空間のもとでの産業の持続的な競争力発揮を見るうえで重要なポイントだと考えている。

第二の定量分析結果は、一般的な経済学の仮説とは逆の結果であり専門家から興味深い発見だとの評価を受けている。企業が多数集まる集積地にはなんらかの「経済性」が発生していると考えられるが、フォーマルな経済理論では「生産性の向上」という形でその仮説が定式化されている。中国の企業データをもちいて分析してみたところ、企業数が多い地域ほど平均的な生産性が低くなる傾向が、マグニチュードとしては弱く、しかし統計的に有意な水準で計測された。この点については更なる分析が必要とされているが、中国の集積地では企業間の製品・ビジネスモデルの模倣が頻発しており、こうした点が生産性を必ずしも高めない結果となって表れていると思われる。

上記 2 点の結果は、いずれも中国製造業全体の特徴を検討する際にベンチマークとなる論点であり、これらは既存研究ではそれほど重視されてこなかった、或いは検証されてこなかった点である。ただしまだ仮說的領域をでない発見ではあるため、今後更なる事例研究と定量的に頑健な研究が必要だと筆者は考えている。